

# 安徳門附近の戦鬪

歩三三 一三二

歩兵上等兵 河野副雄

けたまひし野火の叫び多に耳をすますと  
 ウワ〜と悲鳴とも喚声ともつかぬ人声か  
 潮騒の様を寄せたり返したりして居る  
 薄闇をすかしてのみまよと遠か門道に  
 のやうに蠢く魚数の人影……淡く残月に  
 微かなからなかく閃く銃剣 大の 様  
 野郎来ッがったな  
 誰か絞りに出すやうに叫びました  
 顔を上げる途端 バツと火を吐き 緑の  
 腸を抉るやうな爆音が起る すうと億でも  
 届きさうな様い谷間を蹴んだ小山から 敵  
 は迫る砲 小銃 手玉のこめつた塵ちをや

りだしました  
 夜襲だと言ふ小のに 喇叭も鳴らさず 苗を咬  
 く 喊声もあけず 如何にも彼等らしい流  
 儀です 彼等口を注ぎ谷間に 銃をふり  
 振ると 砲も決して牙をむき 兎鬼羅刹  
 かく押し寄せます  
 四回目で矢敗をしいて 而も及の四回目には  
 江幕大を損害を被つた彼等としては 今度  
 こそ最後の運命を決するのてあります  
 下と、南京の十二月とは言へ既に晩秋と言  
 ふよりむしろ冬です 敵と暮さか一時に襲  
 ひかちかかでした  
 敵は死物狂りで肉迫します 然し我が溝に  
 隊は泰然として之に應戦 接近するのを待  
 つて一番射撃しました 中でも我が分隊は  
 第二回の時の生残りとして 今度こそ敵を  
 迎へて 何としても戦死した分隊長の  
 戦友達の限りをむくいなければならぬ

私達は復仇の一念に燃えやうに燃えたので  
あります

相変らず二筒の擲弾筒で、果つてうちまく  
る。然し今度も亦何十倍もの敵です。敵の

銃砲弾はシブキやうに飛んで来ます。そ  
れこそ息もつけぬ連続射撃です

味方は見よく、一人二人と三十四五名も敵  
弾にやられてしまいました

實に壮烈な激戦が展開され、餘りに悲愴を  
極めたことも何處あつたか判りません

敵は飽くまでも頑強です。襲撃が始まつて  
既に三時間、一時は遠くは退却したのに

此地ばかりは喇叭の音を急園にウワウワと  
物凄いな喊声をあげながら、襲撃されてもいた

れても迫つて来ます

友軍は次から次にやられて行く。今は中隊  
も半数に減つてしまふました。中隊長殿も

始めとし、其の他幹部戦友は、壮烈な戦死

又の名譽の勇儀をして、今は中隊長を少尉  
殿が小隊長を中隊長がうとめらほどで、其の

半数に減じました。私達は士氣旺盛、登  
敵を押し交戦すること幾時間

中隊長殿が戦死された前に言はれたことを  
今もよく覚えておます

皆が知つて居る通り、中隊がこのコブに  
取りついてから、これで四回、夜襲を受

けて居りました。此の分では夜明けまでに  
中隊は全滅した。問題のない者は、鉄帽で

壕を掘り、

と言はれたのであります

中隊長殿の言に違はず、夜が明けるとは、從  
敵は地形に明らなことを利用、巧に近寄つ

て来ます。やがて白米の道くまで迫つてか  
ら手銃の小銃を雨あられのやうに射ちか

けるのです

然し敵、明らなやうにのり、さしも頑強

執拗に敵も潮のやまに退きました。斯くて頑強を誇った安徳門の敵陣地を粉砕し、前進又前進、遂に南東城西南角崖上高く日章旗を上げることが出来たのであります。あ、見よ、副旗としてひるがえり日の丸の旗を、思はず萬歳と叫んだ晴の気持、喜し涙か、思はず涙も落ちるのであります。

手榴弾と天佑

歩三三ノ上ニ  
歩兵上等兵 川野勝

十二月十日 其の日は朝から敵砲の轟音を聞いて震んでおりました。お運はそれ弾雨の中を物ともせず攻進前进了ました。安徳門高地には幾重にも壕を掘り鉄線網が埋まっております。

その安徳門高地にはよく突進命令です。一度前進、突進には止まらぬ時です。一回の突進の無理日ありませぬ。指へてきたと日かり破壊砲日とびです。又れと同時に後から擲弾筒は強射の集射。煙幕構成です。破壊砲の手でみごと突進路は開かれました。真暗闇の中で、敵味方入り混れて壮烈な白兵戦の展開されました。悲鳴をあげて倒れろりには銃剣に刺されたらうしな敵です。袋多の戦友を犠牲にして、安徳門高地もみごとにとり物、息のつかぬ間もなく、明日の攻進のため、壕を掘れとてです。散れた敵は尚も増兵に増兵して、しつとく逆襲すよとて、敵の高地、谷間列ると、ろ剣の尻みたいに、光の重火器の聲が雨あふれと撤去します。

敵陣下の壕掘り一寸二寸五寸一尺と深まり立派な二人入りの立射壕が出来ました。最早やがうなれば恐ろしに足らずです。なほも敵は驚ひかゝつて来るさすかに首都南京を守る敵です。奮戦してゐる時小瀬にも敵の手榴弾が私と外山分隊長殿と二人居る壕に投げ込まれました。自分は一方向から群り寄せ来る敵を相手に夢中になつて應戦して居ました。外山分隊長殿が「それ川野手榴弾か」ととびよりながら注意された声は耳に入つておりましたが私は上の間がないマ、ヨと群る敵に應戦してゐますが一向炸裂しません。不思議と思ひ拾つてみると何と不発弾です。其の瞬間銃後の赤誠こめての御祈念が目に浮かびました。東の方に白ひ雨手を合せました。

夜が明けてみると敵の死体は山のやうです。中隊長殿以下十数名の英霊は永遠の眠りにいつて居られる。其を見た時の気持は筆舌では表せません。

其の翌日 南京城頭高く日章旗は繰りました。あれほど期待してゐたあの日の丸を安徳門高地で散華した戦友に見せてやりたかつた。しかしあの日章旗を纏さんが馬に身を犠牲にした戦友達も、嗚かして地下で喜んで居てくれることとせう。

鬼隊長殿ニモ涙アリ

歩三三工一隊

歩兵准尉

田 知栄心

十二月九日には我獨領部隊は南京西南方安徳門附の敵陣地前に迫り翌日は愈々本陣地攻勢となりました。敵の銃砲弾は容赦なく並線と言はず後方といはず戦死傷者多数を生じました。小瀬が敵と奮戦し

斗遂に第一線陣地を突破することが出来ました

折から飛来せる敵砲弾は我が大隊本部で炸裂し七名の戦死傷者を出し大隊長駒沢少佐殿も顔面に受傷され止むなく其の指揮と鬼中隊長金田大尉殿がとりかへることになり雨後の攻勢は愈々激進を加へましたが大隊長克く指揮され同日夕刻安徳門高地第一線陣地を奪取することが出来ました

同日夜は敵も八師の名に勝けてす教団の巡邏と之を掩護砲轟をして参りましたが急ぐ之を退し翌日南京城を指呼の間に見て私達の胸は高鳴り内躍るを覚えず其第一線陣地の攻勢にうつりました

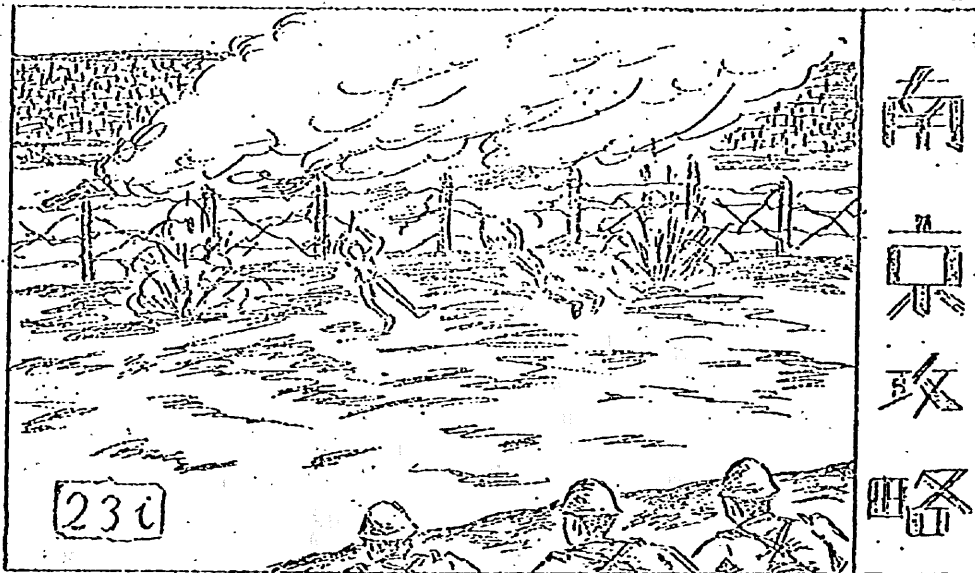
隊長殿は得意の戦術を以て戦斗を指揮され一掃蕩つ、奪取して前進中不意にも左胸部に貫通銃剣を受け其の場にバツタリ斃れられました折から爾夜の作戦命令下達中であった隊長殿は軍医殿の介抱中にも命令を終りて祭し破竹の勢を以て進軍中の大隊の氣勢をあげられました

前日員傷された大隊長駒沢少佐殿が顔面に緋

帯をしたまゝ、悲壯な面持を以て直に大隊を指揮されるのを見てと見て居られた彼の鬼隊長金田大尉殿の両眼に熱の熱い涙が一掃蕩つて居たのを側仁居た者は見のがさなかつた筈です

駒沢大隊長殿の悲壯な御決心に感謝の涙が南京城を目眺の間に見え敵弾に斃れる一念の涙が部下多数を殺して我未だ死なざるの責任観念による涙か

即ちかねてから軍視の正しい高邁な徳操を持て居られ正しいことには一歩も譲らなかつた隊私達には鬼の様にこわい又悲父の様に慕はしい隊長殿でありましたので彼の陣雨下に指揮される時にも鬼の様な隊長殿にも此の涙ありと深く感じましたそして最後まで生残つた私達は隊長殿の仇討と思つて奮戦し遂に南京城に突入することが出来ました



熾烈な精神力……Ⅱ〇……永友少尉  
 勇敢だった戦友達……Ⅰ・Ⅰ……歩軍山田辰雄  
 死を以て任務を果す……Ⅰ・Ⅱ……長田伍長  
 戦友の最後……Ⅰ・Ⅳ……歩上佐藤純夫  
 叱り出して賞の川長……ⅡA……吉原俊美  
 小刀と匙で一命を救はる小行李……長沼上等兵  
 牛車城の落攻め……聯隊本部……歩上河野明  
 南京攻略と籠の飯……Ⅰ・Ⅳ……歩伍官永武義  
 協同一致は暴軍……Ⅱ・Ⅴ……永野直尉  
 頑張る敵兵……Ⅰ・Ⅳ……歩伍官永武義  
 破壊口より突入……ⅡA……歩軍河野武夫  
 南京城の角目……Ⅱ・Ⅴ……渡邊軍曹  
 南京城突入……Ⅱ・Ⅴ……第十一中隊  
 城壁上下の味……Ⅱ・Ⅴ……永野直尉

# 熾烈な精神力

歩三三〇 永友少尉

「深水を出る時には 友軍機は「南京城内敵影を見ず」との通信筒を投下してくれまして 一同は益々元氣溼潤と行軍を続けました

連日の強行軍に 靴の中は「マメ」が破れて血だらけになり 装具ほど運ばせる牛は 足も血にまみれ 蹄跡には血が滲んでおぼろげでありました

急行軍につぐ急行軍でありました。次々に来る二ユースは攻略の進捗を思はせ

師團 南京城の一角を領し  
を報じます

「なかに負けるもんか 先を越さぬてまるもんか」

と疲労を覚へる足取りも 再び軽く踏みしめふみしめ前進を続けるのでした

誰しも同じことでありましたが 軍靴は冷ど疲労程度となつてゐました 猛烈な湯が

襲ひました 道の両側には砂糖茶がありま

す おれを嚙ると喉を潤すことも出来るのだがなあ と思ひながら さつ走つて取りに行くと元氣がなかつたのであります

競争的に負けた魂だけは火と燃へてゐるのであります

既にその熾烈な精神力について行けるだけの体力がなくなりかけてゐました

南京へ

見へる系に

引越り川



歩三ノ一歩兵軍曹 山田辰雄

十二月九日 前進を始めました

赤業試験所附近まで来ますと 敵砲弾を見

舞は川まゝに私が私共は只前への一念で尚前進を続けました

第三中隊に既属せられて八時頃より攻

撃を開始しました 前方に鉄條網があつて前進を阻んでゐます (お水も切斷) と

思つて居ますと 崎田上等兵が

「よし切つて来ます」

云ひも終らぬうちに 匍匐で前進し始めます

お水と気が付いた敵は、おらせむと右の方の

機関銃掩蓋壕から午榴弾を投げ 身迫近く

に土煙を上げてゐる その中で 彼は自若

として発煙筒を焚き 見事に切斷しました

お水「今だと 進まんとすれど その喜び

未だ早く 更にその後方には鉄條網が横た

わつてゐます

崎田上等兵は續いて第三鉄條網の切斷にか

つてゐる 敵は茲々物涼、寒中火を浴せ

て俯首してゐます (無事成功) と 念じ

てゐる時敵の一種は胸に中

「さんいぬーん」

悲涼な言葉と共にパツタリ倒れてしまひ

ました

崎田の仇だ

と瀬尾上等兵は單身敵ドレナイに突込み

ました 當るも幸ひ銃剣で突いてゐますと

敵の奴銃身を握つてしまひ、大格闘が始ま



りました

齊藤一等兵は 敵を滅滅せんものと 小隊  
の軽機関銃弾丸を集めてゐる時 腹部を貫  
通され

天皇陛下萬歳

を絶叫して華々しく散って行きました

# 死を以て任務を果す

赤ニ三ノ三 長田伍長

南京城外の要塞も 疾風迅雷の我が軍の猛  
攻に次々と占領されゆく

十二月十日 空軍試験場附近に於て小高  
兵を利用して小嶺に抵抗して居る敵に対し  
第二中隊は此の敵を攻撃すべく命をうけま

こに小隊は第一線としてギリギリ敵に迫り  
ば 敵は鉄條網を張り廻らして機関銃の猛  
射を浴せませす 小隊は猶豫する間もなく  
障害物破壊班が編成されました 當時第四  
分隊長として勇敢な小渕軍曹殿が長として  
部下四名と共に亂射を喰ひ受ける機関銃下を  
物ともせず鉄條網の線は迫りました  
敵は相変らず猛烈に射撃を浴せませす 任務  
は重且急を要します  
作業は發行破壊と断行する計畫でありま  
したが 仲々思ひ出さず出来ません 敵は作業  
を知ったのか熾んに手榴弾を投擲して 作  
業を妨げます  
かゝる中に心死の作業も將に終ちんとした  
一瞬 一弾は 鬼神の如く勇敢に指揮奮斗  
して居らぬました小隊分隊長殿の腹部を貫  
通し 分隊長殿はバツタリ倒れました  
分隊長殿 しっかりと下さい

傍にゐる兵は驚いて、思はず叫びますと

「俺は大丈夫だ、勿以く早く」

と、空傷の苦しい息の中から命じつ、鉄條

網を指差して居ります

戦友一同の決死の努力、鬼神の奮斗によつ

て、破壊口は完全に出ません

「合隊長殿、破壊口は見事に出来ません」

と、耳に白あて、告げる部下の聲を聞き

さも水望のように微笑んで

天皇陛下萬歳と、微かに聲と共に南京城

外の露と消えらぬまま

「死を目前に控へて正に息を引取りん

とする最後の一瞬迄も、任務の重、責任の

大なるを考へ、倒れつゝ、も鉄條網の破壊を

叫び、切符成功の報告を聞いて奮然として

眠らぬ此の争いこそ、実に責任觀念旺盛

なる軍人精神の發露でありませう

此の尊き犠牲あつてこそ、我が中隊、大隊

の前進を容易ならしめた事を、私共は忘川  
てはなりません

# 戦友の最後

歩三三四 歩六上 歩六 佐藤純夫

南京城南方約八折の地は、材木及鉄筋コ  
ンクリートを使用して掩蓋トーチカを構築  
し、彈丸豐富に貯藏し、優秀な装備を施し  
た一大要塞の遺構が残りまじた  
此が主要索に大穴を掘り、我を待つ敵は  
強攻不落を誇つてゐました  
十二月九日は頑敵と対峙した夜を徹しま  
した。明け十日、愈々戦斗開始です  
敵は南京防衛の第一線たる此の要衝を死守

せんと頑強に抵抗し、火を吐くやうに射り出す投莖機関銃、落雷の如き砲弾が諸嶺に墜き、薄壯を極む一歩の前進も困難です。然し決死の勇士は心勝の信念に燃えてゐます。

小隊は中隊の左第一隊であります。

一歩々々と敵を壓迫しつゝ、敵陣地へ肉迫して行きます。此の時敢然と立ち上つた小隊長殿の血を吐くやうな命令

「突進せよ」

今や塵も屑もまへてゐる勇士の面々は、我先にと敵陣地を駆け抜けて脱兎の如く飛び出しました。敵砲雨霰と受ける中を、勇敢に敵陣深く突入します。

上野上等兵がバツクリ倒れる。私は思はず駈奇つてみますと、腹部を貫通した重傷で苦しんでゐます。

小隊は前進します。私も一緒に前進せんじ

しました。受死死生を同じうして来たこの戦友を見捨て、進まずに出来ません。十二月十日午後四時三十五分、釣籠落しの冬の日。早や地平線に沈まんとして二人の顔も真赤に照らしてゐました。私は早く繃帯を取出して、應急の手当をしてやりました。上野上等兵は私の手を握り、元気を聲で

「佐藤君、此處まで南京々と難行軍を続けて来たが、今此處で南京城も見えず、やう川下のは実に残念だ……」

と言つて涙も見せずニッコリ笑ひました。重傷を貰ひながらも此の気丈な言葉を聞いた時、感激で一杯、臉の熱くほみをさうする。こども出来ませんでした。二人は赤い夕日の下で、手を取り合つた。低衛生兵の来るのを待ちました。

附近には人影もなく 前線の砲丸の音 夕  
榴弾の炸裂の音は私共二人に云ひ知れぬ寂  
しさを感ぜしめず 銃剣執って戦友の間  
迎を見守つてゐる中に 日も暮れて寒さ愈  
愈激しくなつて来ます 上野上等兵の顔が  
りは玉のやうな汗が流れてゐます 苦痛を  
堪へてゐるのでもしやう

午後八時半 やつと衛生隊が来てく川まじ  
た どんほに待つてゐるに事ごしやう私でさ  
へ待ち長ひつたが 苦痛を堪へる本人は如  
何程か...

卑劣衛生隊に收容されて野戦病院へ後送さ  
れる筈にほりました  
担架の上の上野に何か云ひ置く事は無いか  
と云ひをかつたのですが 只胸が一杯で話  
す事も出来ず 無言の境で送られました  
上野上等兵は入院して十二月十一日午前二  
時二十五分 遂に護国の花と散りました



歩三三、TIA 吉原 俊美

轟々たる砲聲 人馬の響

攻黒前進のその夜は物凍り程の惨状の極に  
達してゐました

杭州湾上陸戦斗以来 健脚部隊馬無砲隊と  
して傳へられ我が隊も 首都南京城攻略  
戦を目前に控へて 騎虎の勢を以て慕遠致  
しました 僅か長以下十一名をもって 砲  
身は背嚢を背負つて砲彈藥箱等を 弾薬手  
も背嚢の上の十二発を背負つて進軍し 命  
解搬送に當つては 小隊長敵真先に砲の一  
撃を擔つて先許されるといふ 實に涙ぐま  
しい状景でありました

時は十二月十日、聯隊主力進軍のため迂  
回路を二里も令解撤退をなし、大道に出る  
まごには、短い冬の日は早や暮れ、支那  
軍の焼打戦法による仕業が附近一帯は火と  
煙の世界と化してゐました。

とある殺風景は所に着き、民衆に這入って  
みると大驚かひから支那酒の匂がペンと  
鼻を衝き、ここは天の如く、南京城攻  
大勝の前兆とばかり、水筒を突込み存分に  
啣りまいた。中隊長殿も今日に決つて珍ら  
しくも白中小隊長殿と顔を重ねて居らばま  
す。

疲労と空腹を感じてゐる矢先の酒の味は又  
格別です。疲労は一掃され、鋭気ボツ／＼  
として五体に満ち、百万人たりとも吾行か  
んとの勇気が隊中に溢れてゐます。  
兼たぐ隊の名教令として知られ、おる布  
施者が音頭を取れば、それ合唱して愉快

痛快にの上、この進軍を再び始めました。  
昔、大関帝吉の朝鮮征討に従軍した我等の  
祖先が、城武士が、或る城の攻取に御土辯の  
守本將を請ひて取ったと言ふが、今の我等  
の心境に相似たるものがあります。  
ところが突然前途中止の命令です。

昏ヤツとたり、隊長殿が  
待つてゐますと、隊長殿が  
「今取つたのは誰か、名を言へ、我が部隊  
が酒に酔つて敢て南京城を攻取つた  
とあつては外聞が悪い、隊の名譽此の  
上なしに、取つた者は正直に言へ、言は  
ないと言ふは前途進ませぬ」  
もう南京城も後の里しかなく、一瞬の  
猶豫も惜しい場合です。

吉原が歌ひました。  
即刻名乗りを上げました。  
ムツカリ屋の隊長殿も、馬の上で破顔一笑

コシ 敵は止め 前進

一休何の事やり敵は判りません

追及間に一回敵の襲撃をうけまじしが 積

極的行動のため短時間にて敵に多大の損

害を蒙へて退を敗走せしめ 我が方は一兵

も損することなく大いに健脚部隊の面目を

榮耀したるは 此の時の又那箇の功による

所甚大なりと感ぜられた

愈々南京城西南角攻事に當りまゝては 中

隊の最前線に位置して敵砲彈の霰中火を浴

び乍ら 小隊長宮本澄尉殿指揮で 分隊長

本上軍曹 四番砲手控屋二等兵 三番砲手

前田一等兵の沈着勇敢なる動作は 良く敵

の重火器を制壓して崩れ 突進部隊の南京

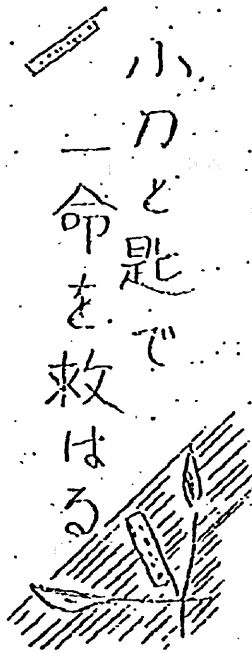
城占領に多大の貢献をなしました

此等欲然者が昔彼の時前進中止を喰った歟

五洲であった事申す迄もありません

後日 蕪湖で上等兵に追殺を命ぜられし

の宴会場席上で 前進中止の日の出来事と  
隊長殿自ら論せられ 叱られぬが賞めら  
れりと言つた談で 隊長殿馬より破顔一笑  
の御心持が始めの判つた様は次第です



歩三ノ一 小行季長沼一等兵

南京攻略の前日 小行季は振劔をつくつて

第一線に運ぶことになり 一晚中手の皮が

はげし血が出る程澤山握りました

朝露を受領して 山川と一緒には一線に

向ひました 處が途中敵弾が来て仰々前進

出来ません 彈藥箱に當る 全く危険十萬

です せいで山の裏に廻つて遠敵してゐま

すと 甲佐班長殿と酒井班長殿が山の高い

所に行つて煙草ほど喫し乍ら戦争を見て居  
ら川ます 私も怖いもの見ださには這ひ上り  
ました

丁度その時 十間程前に迫る砲彈が落ちて  
バツと砂煙りが上りました  
（家たな）と思ふ瞬間 胸をガツン と打  
たれた こまったと思ひ

「やら川た」と叫びたのですが 觸つて  
みても別段痛む所もありません

（おかしいな）と思つてゐると酒井班長  
殿が

「長官 あたつてゐるぞ、こゝは危いから下  
に還川」

と言はれるので 完全地帯に下りますと

胸をやら川てゐる 穴があいてゐる

の言等にかゝると乍ら 物入川から手帳も  
失して見ると その中に狭んでゐた小刀と  
幾で破片が止つてゐます 手帳も小刀も是

も凹んで居りますが 肌には少しも傷はな  
く唯少し母指爪に赤く傷つてゐるだけでし  
た 班長殿が 如何にも感心したやうに  
「長官 この小刀と是はお前の命の親だよ  
一命を拾つたも同然だ」  
と言はれましたが 私もうくく 神佛の加  
護の有難さに 今更感謝の念、深く致しま  
した



歩三本部 未上等兵 河野明

十二月十日午後 某高地を占領すべく 第  
七中隊の第一小隊は小原窪尉殿の指揮によ  
り背裏も彼方に残して 一斉に高地に向つ  
て突入し 第二線の鉄條網を張り廻らした

凹地に取ついた時です

頭上四米位の所から敵の矛楯群が盛んに落

うて来ます 伏せやうと思つて下をみると

そこら一面真の山です、伏せやうにも伏せ

られず 然の儘に居ると鉄條網波る遠に全

滅してしまふ 止むを得ず大砲と大砲の間

に手をついて犬のやうな恰好をしる 鉄條

網の破壊を待つて突入しました

漸く高地を占領した時は 手柄話より先に

先づその話に尻を突き 昔楠木正成が千早

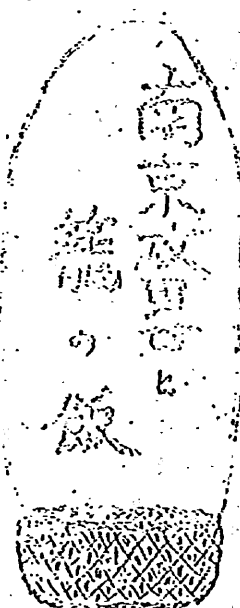
城の戦争で大砲を矛楯群に使つた事が思は

れ 此の支那の方法も支那兵らしき新鋭斗

法とらしく 一同高笑いでした

此水には無敵軍を我々もホトク奪つて

しまがせした



歩三三、四歩兵隊長 宮永武義

南京城を陸地も砲が軍の手にお領されて

私等は時を移さず突進し遠處を進行しまし

た 前方の山と山との間には南京城壁が見

え初めました

オ！城壁だ、南京城壁が見えろぞ

私共は息はず叫びました 狂喜しました

時午後五時頃 南京城南方約八〇米の地

点で 分隊の旗幟をみますと 甲村一等兵

の姿が見えます

今迄誰かと一緒に突進して来た筈です

不思議で有りません 小隊長殿に報告して



探してみやうかと思ひましたが、今少し待  
つておたら帰つて来るだろうとべ待ちに待  
つておました。

数分の後には元氣な姿を見せて歸つて来ま  
した。軍衣の袖口から物入水辺りに飯粒を  
一杯つり、右手に籠、左手には大きな籠  
を持つて歸つて来ました。その恰好がとて  
も滑稽で今想ひ出しても噴き出したくなり  
ます。

私は「飯ドトと叫びました。飯を見え瞬間  
急に空腹を覚えました。無理もない事です  
昨夜米一粒の飯も食つておないのです。  
中村一等兵は如何にも悪い事でもしたやう  
に「選くなつてすみませんでした」と詫が  
るのです。

小隊長殿はすかさず

中村 珠魚の甲にが

と、賞讃された上に、その言葉が終るや否

や、兵隊は飯はく、と狂喜の聲を連発し  
ます。その嬉しさは例へやうもありません  
でした。

中村一等兵の話によりますと、前進中敗残  
兵を一名発見したので追ぎて行くと、計ら  
ずも谷地の一家屋に炊いたばかりのホヤク  
の飯が釜一杯その儘になつておるのを見付  
けたので、早速附近にあつた籠に汚れた手  
でつかみこんで来ました。さあおんなで食  
つて下さい、と言ふのでした。

小隊長殿以下全員、狂喜し乍ら籠の飯を五  
本箸で食ひ初めました。

美味しかつたとも何とも例へ様が行く、何  
時どうして喉を通つたか分りませんでした。  
飯が美味しかつたと云ふよりも、飯にあり  
つく事の出来たのが嬉しかつたのです。

今に至るまであの時の様に美味しかつた飯  
を食つた事はありません。

戦斗する度にいつも想い出下一生忘れる事  
の出来ぬい 南京攻陥籠の飯です

協同一致是日本軍

歩三三〇五 永野 准尉

十二月十一日午前と午後、南京城外に於ける敵陣地攻撃は、歩砲の協同がうまくゆき痛恨だった陣地攻撃は未だ嘗て一度も止まらなかつた事がありませぬ  
それより前日まで、南京へくくと各部隊が道路一杯に有り、先を襲つて歩兵も砲兵も輜重も進み

「何砲兵のやつせん砲兵」  
「馬鹿 豆袋砲が何か」  
と口論として居なかつたら、そんならにまで

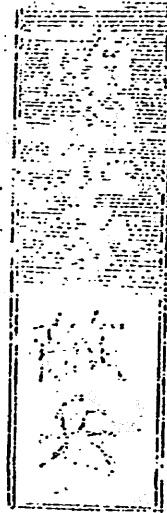
感激しなかつたかもしれませぬ  
しかしいざとなれば 互いに自己の全力を盡して一致し敵にあたるの美風こそ、世界に冠たる日本軍の所以であります  
新隊本部から見た様を記し、感激を新にす  
ると共に英霊に更に感謝を捧げます

本部から傳令が飛ぶ中隊へ――中隊からは各小隊へ、敵陣と巧に避けながら敏捷に飛んで行つたと思ふと、今まで何処に居たか知らぬ程の兵が、堆土から墓地から、塹壕から、湧いた如く現はれて前進を初め、つした。砲兵が一齊に火蓋を切る。發射炸裂の凄じさ、正に耳をつんざくばかり。百發百中の砲弾は、移動する敵を冲天高く吹き飛ばす  
銃線網百米位の所に停止した部隊の左右から、数名の發煙班と破壊班が出来たので、砲兵は射程延伸をします

發煙筒を投げて鉄條網に迫付きます  
 敵の猛射で一本切つては伏せる 伏せつて  
 は亦切る 破壊が終るか終らぬ頃 又砲兵  
 が第一線陣地を射ち始めました 破壊班は  
 以前にも増して激しい砲煙の中に鉄條網に  
 しがみついておます 砲兵が煙弾を射ち始  
 めました 部隊は前進を始めます 鉄條網の  
 附近に砲弾が落ちます あゝ危い と思つ  
 ておると第一線陣地を射ち出しました  
 歩兵は破壊口を通過する 光頭小隊長殿の  
 軍刀が擦めく 一名通過ニお一三名一  
 あり 敵が手榴弾を投げる あれも名廻つ  
 たり 兵隊長殿と兵の中間に炸裂しました  
 兵士も倒れ (おれはか) と思ふ瞬間  
 目をさつたりおした  
 敵前を数米に迫つて  
 珍念であつたらう

と 起き上りました 倒れたのは伏せお  
 たのです そして敵陣に突入して行く  
 (あゝ宣のつた) と 胸をなで下しました  
 砲兵の観測班は隊長殿以下  
 よく突進してぐわました ほん  
 とに胸がすつとします 犠牲者が無け  
 ばいいが  
 歩兵は隊長殿以下  
 (砲兵がよく快刀して呉れた 重大な時運  
 速確突に射撃をして貰ひ有難う) と  
 互いに汗と埃に目みれに顔に安堵と嬉し  
 感謝と一つにして 犠牲者の少い事を祈り  
 ました





宮永武義

十二月十一日午後五時、中隊は左第一線として攻兵前進し、奈り、主障地前約五十米の高地及戦車壕に突進し、敵行しました。敵情は論ずるまでもありません。

彼等が此處を最後と必死に打つて構築した主障地、ペトン式トーチカを初め無数に掩蔽壕、陣地、重機銃、重火器を備へて、間断なく火を吐いて、おます。我隊攻撃に互に敵の射撃は甚だ苦痛であります。

南京防備も今度最悪かと云はれるやうに、私連正箇のトーチカ、陣地は重火器の射撃と、時計で付かす如く手榴弾を投擲して、おます。

多分私連の退却を恐れたのでせう。

私連の退却は戦車壕にけ、その破片土煙がとんで来ます。動れば射つ。山隊は戦車壕に突進したす、身動きも出来ません。一寸物音でもしたら最後。正面の重火器は一齊に猛射を浴せしめて、

私連は警戒と作業の二班に分れて陣地構築にかかりました。固い岩でできて鉄板に穴を掘るのと同様でした。而し何事も打たぬ水全力を集中して構築に努めました。

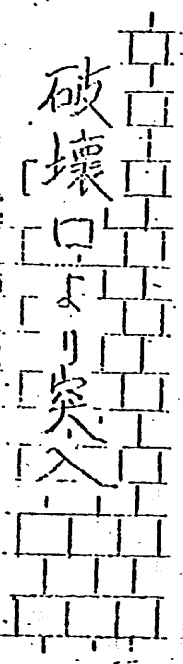
三日時間にして漸く散兵壕を完成する事が出来ましたが、相変らず射撃は止みません。

私連は緊張裡に一夜を明しました。明けぬ日十二日、愈々主障地攻撃です。拂曉と共に我々が砲兵の一齊射撃が始まりました。

百発百中とは此の幸でせう。私連より僅か四五十米しか離れて居る敵トーチカに、一發も損せず命中します。

その度毎に松尾は砲臺を上りて喜びました  
 砲臺は松尾の陣地も次から次と破壊されて甲  
 きます。これと敵は依然として猛射を續け  
 て行きます。退却しやうともしません  
 手榴弾を振り廻して抵抗する敵も、友軍の  
 的確なる猛射に巨砲へ着弾して、一人逃がら  
 ず。退却しやうと退却の模様が見受けられ  
 ます。砲臺は向の如く飛んで来ます  
 その中で正面の重機は尚も居座りて火を吐い  
 て居ます。敵作りの天晴水戸奴と感心して  
 おます。砲臺の間隙をみて重機を肩に  
 ノックと、陣地の上に現れおした  
 と云つて一歩、お突しおしたにが却々中り  
 せん、潜むか、又出るか、敵回線返して居  
 ましたか、突かれたのか、その後姿をみせま  
 せんでした  
 砲臺は破壊されて、主陣地へ突進です

武裝を整へ中隊は一齊に主陣地目がけて突  
 進しました  
 敵は退却し、大成功です  
 その瞬間目に映じたのは一人の敵兵です  
 破壊された陣地に重機を握りしめたまま、息  
 絶えておます。馬尻野郎が早く逃げんから  
 だと、言ひたい気持ちでしたが、一歩踏み入  
 つて考へてみると敵作ら感感せざるを得ま  
 せんでした



十二月八日夕刻、建平衛に進出、情報に依  
 りば友軍は苦戦中との事です。林を戦場と  
 急進せよ。今日で何日目の進軍戦か、そ  
 れもへも思ひ出せぬ位でありました

気合が入ると、先向き攻め、城の裏ばかり考へ、  
夢中で前進し、さした。しかし、いくら気合が  
入つておると、付言へ、遠日の遠征戦、その  
上、今日夕合も、命はずの急進来ぞ、  
其隊の疾速、おろのも、無理もない事ぞ、  
唯黙々として、論も亦も居ない。此の状況を  
見らぬ中、政長、香川、大尉、殿、日、大、多、を、聲、ぞ、  
南、京、城、は、近、い、ぞ、元、氣、を、出、せ、死、ん、で、も、跟  
り、て、来、い、と  
と、激、動、さ、れ、ま、し、た  
一、同、日、元、氣、づ、い、て、夜、通、し、前、進、し、ま、し、た  
九、日、朝、四、時、餘、々、南、京、城、に、距、る、事、三、里、敵、大  
部隊と激戦中なり、第一大隊に、加、日、り、攻、表  
す、さ、れ、ど、敵、の、首、領、南、京、に、日、に、前、進、困難  
です、友軍は、次々と、倒、れ、行、き、ま、す  
敵、彈、雨、落、す、中、も、前、進、又、前、進、此、の、時、は、敵  
彈、の、思、ひ、ど、問題、で、な、く、只、南、京、城、を、領、の、  
業、は、か、り、で、あ、り、ま、し、た

十二月十二日 南京城四百米に迫りました  
野砲重砲の城壁破壊射撃が約四時間行はれ  
ました。その結果、事は全く言語に絶し  
敵は砲弾の中で右往左往して、死守して居  
ます。  
支那軍も天晴れを奮戦振りです。城壁に近  
寄る大軍に、チエ、ミ、銃、を、い、ど、い、て、射、つ、て、お  
ろ、の、が、よ、く、合、り、ま、す  
退却、振、舞、も、な、く、頑、強、に、抵抗、す、敵、も、我、が  
猛、攻、に、は、如、何、を、せ、ん、午、後、四、時、三、十分、城、壁  
破壊口は出来ました。  
友軍は待つておました。七、時、が、り、射、下、す、す  
エ、コ、銃、弾、の、雨、の、中、を、物、を、も、せ、ず、第、九、中、隊  
は、真、光、に、城、壁、に、迫、寄、つ、て、行、き、ま、す、死、物、に  
い、の、敵、の、猛、射、の、中、に、兵、隊、を、散、行、じ、午、後、五、時  
四、十五、分、南、京、城、の、一、角、を、占、領、し、ま、し、た  
南、京、の、聲、は、祖、國、日、本、に、響、け、ま、し、と、は、か、り、ま、し、た  
日、章、旗、は、高、々と、掲、げ、ら、れ、ま、し、た

数十日の苦勞も打忘れし濁流を喝破し、  
へる日意氣を仰いで、誰の顔も感激の涙が  
充つておました。

南京城の一角を突入

歩ニ三ノ一。渡邊軍曹

人馬は今日も追雲 明日も行軍と 南京を  
して遠處を續けておました。  
汚れた顔と洗ふ氣力もない。誰かが疲れて  
おます。

おいお前も顔位洗へし  
と叱るやうに言へば  
おん心に汚れをぬるか。此の間洗つた  
ばかりぢやないか。  
とさも意外らしい顔して答へる。有様でした。

さしもの行軍もいよいよ終りに近づく。南  
京城は日暮の間に迫つて来た。  
私共は左第一線に出で、南京城西南角から  
南へ流れるクリークの左を行き、敵の右側  
背を衝いていく命ぜられおました。  
クリークは泥が深く舟がなくては、とても  
渡れない。それがと言つてそこらに舟など  
ありませぬ。第一小隊の某兵がどこから持  
つて来たのか盪に乗り、両手で水をかき左  
対岸に取りつき、綱を引く。雨と霧が来る。敵  
陣とものともせず、彼、臨戦の作業により  
全員渡す事が出来ました。  
それを見て敵は浮足立つ。七百米程の所は  
陸地を離れし翌朝はクリークの右の甲隊主  
力も左に渡つて前進を始めました。  
だが城壁はクリークの右である。今一度渡  
らねば行けません。まかはいつか渡つてし  
まつて我々ばかりは後れても構いません。

どつしても敵前五百米のクリークを渡りぬ  
ばなりたいた敵の素り捨てた舟で渡うと  
すれは敵は掃射を浴びかけり、先頭の兵が  
飛び上つた爲に舟が流の中に来り、しまひ  
動かぬやうに立ちました

その時其の音程は、おかしうな響きあり  
クリークには霧が、舟を押し、進して全員  
渡してしまひました

いまく、西の角に突入する、とにたり、廟  
の地点で野砲の支援射撃、銃ののを待つ  
前進開始、我先にと城壁前の一木橋に殺到  
し、戦友に遊水するらじと、銃行軍の疾走  
も何処へやう、只誰か後しが火の塊のやう  
になつて城壁に突入致しました

# 南京城突入

歩兵第三師隊 第十一中隊

中隊は大隊の左第一線として十二月十一日  
午後三時南京城南約二百米の地点に進出  
して同地を確保し、夜を徹しました。南京城  
壁周囲の敵は終夜我に向つて乱射を浴びま  
した。十二日午前七時三十分左の如き大  
隊要旨命令を受領

一大隊八午前八時三十分攻撃ヲ再興シ先ツ  
三里店西方高地ノ線ニ進出シ、爾後ノ攻  
撃ヲ準備セントス

二第十一中隊(李師屬)ハ左第一線橋梁部迄  
ヲ登テ章家村北方小立草ノ線進出スベシ  
命に依り午前八時三十分攻撃前進、要圍の  
様を懇懇力を以て正面の敵を裏退し午前九時  
前命の地点に進出シ、城壁への突入を準備  
しました

午後三時愈々戦機熟す、中隊は突撃準備既  
に完了し、今は突撃命令の下りのを待つ  
のみです、城壁上には我軍砲弾が炸裂して



敵陣一帯は煙に包まれ突に非難です

掩蔽に極む敵は白頭旗に抵抗を續けて居ます  
午後四時十分 突急路開設と同時に中

隊は敵の大層を先頭に全力を以て攻撃に殺  
到しきしに 折衝第其の中隊の一部は中隊の

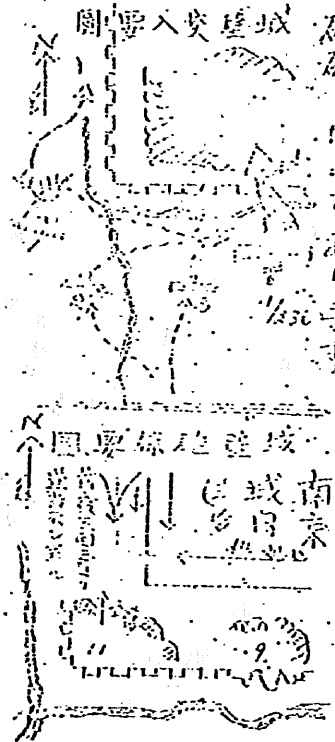
右方から城壁の上へ突入して遂に格闘中です  
史を察見しに守隊長は一帯に城壁の上へ突入

して群り素に敵を逐ひ伏せ切り伏せ 午  
後四時四十分 敵は西南角をと領しきしに

然し一度敗走した敵は城壁上の奪回を企圖  
して敵回に向つて猛烈な攻撃を試みした

が 中隊全員は流石に之を迎撃し火力と自  
兵に依つて上を退還し その企圖を完全

破砕したのであります



# 城壁上へ酒の味

歩三三ノ五 永野 准尉

十二月十二日午後二時頃 南京城壁下で部  
隊一の酒意能澤大尉殿の酒を 悪いとけ知

り乍ら雷帯の持つ水筒の収まり筒へ蓋で一  
杯戴いた茶の味と 翌日城壁上へ捕見准尉

の酒を 今ヒがに昇る朝日を拜し乍ら戴い  
たあり酒の味は今に忘れ得ません

前者は今から決死の覚悟でやらねばならぬ  
と思ふ時 腹のそこがじんとなつて口が渴

く それに一杯たつたから 舌のつかうたし  
飯者は とうとうおつかうたといふ嬉しさに喉

かつたりそうになつた折やわたのだから美  
まかつたのです

酒の味は細はよく分りませんが 時を場所によつて違ふものです  
も一度重慶あたりで

うたふ水はと言ひ乍ら味い度いものです



南京城内

# 敵の自動車も 取逃した失敗

歩三六 上等兵 橋 忠雄

昭和十二年十二月十三日 南京は遂に陥落  
いたしました。我が第一師団の一角では盛んに  
戦闘をしております。  
第六中隊は、我々第二小隊と先鋒にして  
西南の破壊口より城内に入り、城内の掃蕩  
をやることになりました。  
城内には左の方に何中隊かの一部が出て  
掃蕩をして居りました。我が連絡を取る

事もせず、小隊は單獨で小隊は道をぐんぐ  
進んでやがて大通りに出ました。  
後でこの大通りが上海路である事を知りま  
した。が頑丈に作られた移動障害物等を取除  
き乍ら北へ向って突へくと前進します。  
やがて難民西の所迄来ました。東の方では  
彼等の銃砲聲が盛んにします。  
我々の目の前にも、迫撃砲聲が三四聲  
續いて炸裂しましたが、損害は有りません  
でした。  
難民区の前から五十米位先に十字路が  
あります。其處で私は歩哨に立って  
通過する自動車も鹵獲することになりました。  
やがて一台のオートリングが右の方から疾走  
して来ます。  
来た後  
と、はやる心を押して静めて、遂に隠して

待ってゐますと、段々近づいて参ります。四五十米の近くに来た時、發ひ出して道路上で立射の姿勢をとり、自動車の前に立塞りました。自動車は、グートスピードを落して停車しようとし、しますので、察するより生虫が鳥と見せ、内心喜びつ、少し右に寄つて停車を待たせました。所が今正に停止しようとした車は、自分が身をよけたその隙を利用して、急にスピードを増し、北にカーブを切つて走り去るに走り出して仕舞ひました。見れば、確に支那將校が乗つてゐる。ハット、思つたが間に合ひません。後等を追ふ様にして、三四発打つてはなした。自動車の雲を霞と逃げ去りました。口惜しく、たまりません。功を心に、から川し一人がかつたのが

悪いのです。初わたのことは言ひ乍ら、何んの隙も設けずと警戒したのが失敗でした。うか／＼と道を開けたのも、氣を許して油断したのも失敗です。南京城陥落の喜びの蔭に、私の斯うしたほうにがい失敗もありました。

赤三三三

改歩兵隊長

塩月昌也

不甲斐なき

白衣を恥じて目をつぶりや

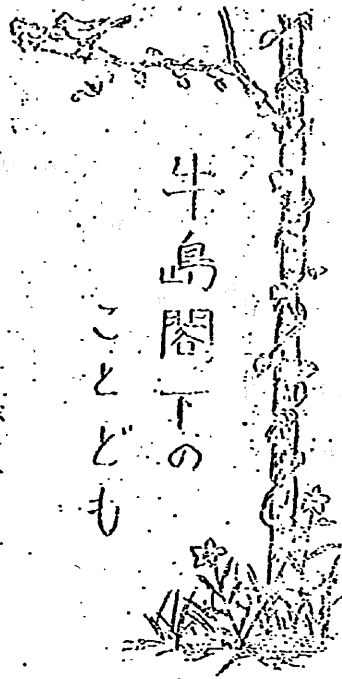
曠野を駆り馳す顔

輸血

にっこりと笑つて搦てる

乙女等の尊き血汐に

鮮血を泣く



ことども

歩三三

座談會

山田軍曹

荒んで 第九師門の馬が道路側の溝に落ち  
込んでゐるのを 兵が四五名で引き上げ様  
としておましたが 仲を起さ上げません  
驛でゐる中或一名の  
馬の耳に水を入川とすゝ起ると  
どうか

丁度其處を牛島閣下が通つて居ら川

たか

馬鹿が馬の耳に水を入川とすゝ起ると  
まふぞ  
と微笑み乍ら叱つて居ら川ました

酒井渡尉

十二月七日南京六七里前アソブ村で田上と  
等兵が鹿を射止めたので牛島閣下にあ  
げた所

土は吉龍だ 南京はもう我々の一彗来た  
と川は目強度  
と大變喜ば川ました

甲斐軍曹

象森で我々一ヶ分隊が第一線に糧飯を運ん  
であた 丁度閣下が通ら川

ヨイ 赤前達は何すか  
ハイ 第一線に飯を運んでゐる所じ

ありきす。

そうか、よく氣をつけやつかぬ風

と、自ら敬禮して居ら川る。何と返事して

宜いやり、只頭が下ろのみでありました

而、捲送を以て、夏傷兵に對しても、一々戦闘の

狀況を聞か川

何心配する事はない。入院したらすぐ癒る

んだから

と心から慰めてあられました

閣下は常に笑顔で、兵隊にも親ま川る。偉大

な人柄者でありました

畑中軍曹

南京城一番泰りの時は、旅団長閣下も飛び込

ま川て、只萬歳を叫ぶのみ、何とも表現せ

ない氣持でした

山田軍曹

南京城外に旅団本部が居った時竹の上

閣下に賞めら川て

元氣百倍



歩三三十一

甲斐軍曹

昭和十二年十二月八日の夕暮れ時でした

陽は既に没して空高く鴉は羽に急ぐ

一日の強行軍に疲れた兵は黙々として聲

はな、コツくと軍靴の音のみ聞える

既に今日は十里は歩いた先から部隊も

見る度に、今度こそは彼の部隊に宿營だ

と思つて居るが、この今度こそわが  
なかく来たのです

中隊長威は宿營するのを忘れて居らぬので  
ではあるまいかと思ひながら重い足を引  
摺って進んで行きますと、牛島旅團長瀧下  
が、道路の傍に馬に架つてとまつて居らぬ  
は、そして滝爾として

二十三聯隊が、元気があつて生き  
して居るが、

と仰しやうな、私どもは發行軍でへと  
く、になつて前進して居るのに、旅團長  
瀧下は、生きく、として頼もしいと仰し  
る、もう少し元氣を出したら、無敵第六師團  
の名に恥ぢず、威風堂々と進軍出来ると思  
ひ、揚りぬ足を無理に高く揚げて進軍しま  
した



### 瀧下と

### 十二名の捕虜

牛島旅團長瀧下は出征以來、朝用便も済ま  
さぬ習慣でありまして、而も小高の女と  
か広々とした見晴しの良い地をお選びにな  
るくせがありました

十二月九日の朝は未だ明けやらぬ朝霧が立  
ち込めて敵味方の判別さへつき難い頃で  
ありました  
牛島旅團長瀧下は出征以來、朝用便も済ま  
さぬ習慣でありまして、而も小高の女と  
か広々とした見晴しの良い地をお選びにな  
るくせがありました  
其の朝も例によつて只一人宿舎を出て格好  
の地味をお選びになつたことでもしやう

丁度どの最中、軍曹と分隊長とする

ケエツク一、小銃拳銃を有する十二名の敵軍が

のこくと出て来たのであります。全く危

険此の上もな、事でありすが、閣下どの

間に何んは紳士協定が成立いたしましたも

のか、やがて宿舎に帰らぬ閣下の後には

新らしい部下十二名が、いとも温順に、守

堵しきつた喜びの色こへ、浴べ乍らぞうく

と従ふのであります。喜色満面の閣下は、江口副官殿に聲をかけ

らぬ。江口君、今朝俺びんは兵隊さんば拾つて

来たよと申さぬます。

え、閣下何處でございますか。

外には武裝りりしき、支那の兵隊、先頭に

隨然たる閣下お一人、副官殿の一同はた、嗟然としてしまひ。

ました

序快は閣下の爆笑は

南京城早急が手中にあり、わが強

感銘を將兵一同に與へました

閣下自ら捕虜にせぬに、この十二名は苦力

として部隊で使用するにたり

南京、天平府、寧國蕪湖、宿慶、漢口攻略

戦と従ひ、大治の警備の時、昭和十二年

十二月十二日、温情限りなき吾等の部隊長

御常轉御出発の日、小雨降る中に苦り全部

も御見送りいたしました。閣下は、不前進にも御話になつたね、元気で働いてくぬよ

と、わがく、可穿な御挨拶をなさいました

言葉は通ぜずともこの御温情に苦りの類

にも心はしか愛別高懸の色が見えました

偉大なる感化は苦りの一人に未だも及ぶも

の、今尚當時のことが想出さぬます

# 感激の萬歳

歩二十三連射砲中隊

歩兵中尉 飛松良平



行軍の途中頸を折して居る兵が居ると必ず  
馬上から励まされました

おいこりお荷や何中隊か 名前は何か  
南京はもう近いけ頑張れよ

と 兵は又元気を出して歩き出すのでした  
然し一度戦斗とすると後に従ふ吾等が弱  
って終う位ひびいた 敵弾雨飛の中で

おい下士官頭を下げたらんか聲が當つど  
と叱られます そのくせ御自分は儼然と  
して双眼鏡を敵を見て居る

江口の割官 山口割官

頭が高い 姿勢が高い

何回注意されたの判りません

或時 江口割官殿が

閣下弾が来ます危険ですから壕に進入  
って下さい

と言はれますと

俺どもは年寄りだから弾が當っても良か  
お前達は先が長いから壕に進入し

萬事この調子でした

南京城西南角占領の場合 僅か一番歩中  
隊の一角小隊が登ったばかりなのに 直ぐ

後から山の割官を随へ 敵弾雨飛の中を城  
壁に攀登る川 中隊長小隊長と共に南京城

占領の執杯を食ふ川 將兵と共に萬歳を  
五回さ川ました 居會った將兵の感激の中

す迄もありません



晴天の霹靂

歩兵 准尉 飛松良平

漢口より激固は大治地区警備のため石原軍  
に向い行軍中でありました

大治鉄山の直前で 休憩中の某部隊を追越  
しました

苦力を見らぬ 閣下は  
おいさん 苦力は詮山が選んであるのか

と云はれました  
某兵隊は

ハイ

と返事しました 吾々は行き過ぎました

大治鉄山も過ぎて 今度は我々が休憩し  
てゐる所を先に追越さぬに部隊が通り越し  
ます 所が先刻注意さぬに苦力が木だ居る  
のを発見さぬに閣下は

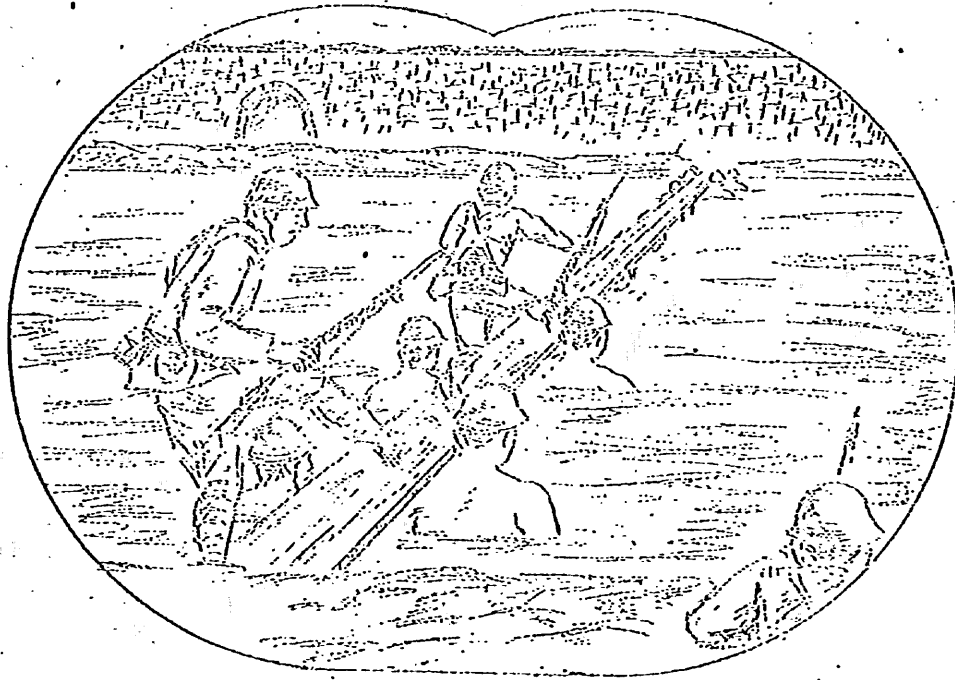
こらっ 未だその苦力を使つてゐる

晴天の霹靂 百雷一時に落下する様な大音  
聲が 大治山に木霊しました

前進中の部隊は道路上に釘付に反り咳つ  
するものはありません

苦力は現場から早速解放さぬに 問題は  
簡單に解決いたしました

閣下大ま。如き閣下の容貌は何時の間にか  
又ニコノと慈父の笑顔に変わつて居ました



## 工六 署 攻 城 京 南

### 工兵第六聯隊本部座談會

津崎少佐 (R本部)

勇敢であつた兵と通訳の話を感じます

南京城間近に接して居りました私の隊は、敵砲弾があまり烈しいので、本道方面から山地方面に位置を轉じ、攻果の進捗を待つて居ました

時恰も晝食前でありましたので、中隊の傳令が山上等兵は通譯と共に飯盒收事すべく少し離れた部落に行つたのであります。すまじと輕機関銃其の他小銃を有する約六十名に近しい敵と遭遇したので、之を見た兩名はすぐ武器を捨てる事を要求しました。そして遂に之を実行せしめ、五十餘

名もの着を捕虜として連れてかへりました  
是れは敵が眞意を失して居ったのかも知  
れませんが、僅か二名位で武器を持つ敵の  
前に立つて、これだけ要求する事は余程膽  
力がないと出来ないう事と思ひます

下野軍曹(一中隊)

上陸して幾小豆来て平病のため入院  
海軍後送せられた

色々とニュースを聞いて見ますと、明りに  
し南京が落ちさうな話、之はゲズ、  
あつた大度と、軍医殿を拜み倒して  
泣いてみたり、やつとの事で十二月の五日  
に遼陽、同じ師團の兵隊七七八名追及すべ  
く行つてゐますと、丁度良の事は第一線  
に行く、軽装甲車に逢ひ、何処でも構ひま  
せんからと無理矢理に噴みこんでのせても  
らひ城壁を脱人機を伺つてゐる、ハリさつ

左小隊に追及する事が出来ました  
小隊長殿に

「たか平病で入院してやつとも戦ふら  
い、戦ふもして乃せんから、一線に出  
て下さい」

と申しますと、小隊長殿が

「遼陽して追及したばかりなのに馬鹿な  
と言ふな、俺が丈夫を聞は決して一線に  
は出さん」

と此りとはされたのを、病院で味を占めた  
拜み倒し、戦術でやつと南京城外にめぐされ  
た水壕渡河に必要な民船徴発の一員に加へ  
させてもらひました

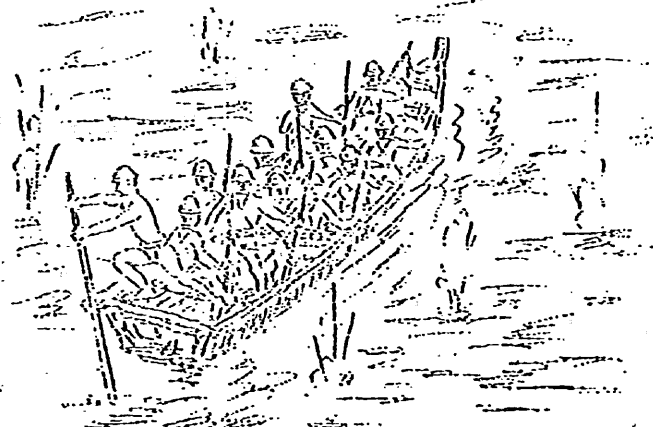
軽装甲車に乗つて来た甲斐があつた、御父  
さん御母さんと腹に巻いた子人針をさすり  
ながら、嬉し涙にワト我を忘れた事です  
ところがその民船存人ですが、敵もさるも  
の対岸にはあつても、此方にはありせん

彈丸の中を泳いでとりに行かなければなり  
ません。ッま、よ」と一つに千人針を巻  
きこみ水の中に飛びこましました。

ツス／＼と体の周  
圍の水にはげけり  
彈の音も無代夢中  
手近の奴を一つ  
矢射して綱を引切  
りこつちの岸に  
引返しながりきけ  
を見る。之は亦  
な人と剛膽な  
悠々と漕いで岸に



つき早第一級部隊をかせてゐる戦友が居ま  
す。之は肩リぢやならんと自分も舟の中に  
躍り上り棹をさして岸につき部隊をかせ  
て第一回目カ漕渡を終り第二回目的漕渡  
を終へての帰途先に行つてゐる剛膽居士



が前の舟りにバツツリ

水ます。シマツタ  
と思ひこちらの舟で  
向うの舟をつぎやり  
つへ岸にたどりつき  
第三回目的兵隊を渡  
し、こちやう城壁上  
の敵を制圧すること  
が出来ました。後で  
聞きますと立派に戦  
死したさうで時々  
彼は舟の兵隊に自分  
は素裸で並つて居つ

ても  
「姿勢を低くし行さい  
と言つた事と言ひ、其の剛膽と機敏さと言  
ひ、其の魂の尤の尤たるものと感激の中  
に、あざへき水な哀悼の念を禁じ得ませ

んでした。——靖國で會けり。——兵隊が  
泣ける時は、人なす時です。

奥平上等兵（二中队）

南京入城前、十三聯隊の二大隊に配属さ  
れ、破壊を計して攻撃命令を待ってゐた時であ  
ります。

夜の十時、羊頭將校自候が啼へつて来て話さ  
ますのに、向うには鉄條網を張つてあると  
の事、そこで中队より三ヶ班の破壊班を出  
すことになり、田畑上等兵、福田上等兵、  
それに私が一個班を編成することに  
なり、早速準備して行つて見ますと、深さ四米、  
蛇腹型のもので、器具に防音装置を  
し、猶その上にも念を入れて、夕オルをかぶせ  
て切りました。それを切つて暫く行くと又  
しても二米位のがあります。之はまあいと  
思ひましたもの、聲見されたらそれ迄

と切り始めますと、籠の処に外養がかり  
れて居ます。さほつて見ると、ほのかに暖み  
があります。之は天好没利（イナ）と左の田  
畑の耳に口を寄せ用心すべく申傳へました  
、いくら音を立てぬ稼にして、おやほり者が  
します。

それをどうやら切つて向うを見ますと、員傷  
兵が一人居ます。かくしに持つた、仁丹を  
くませて、開きかざりの支那語で、きくと、  
十五分程前に退却したと言います。告報  
と躍らんばかりにして、啼へり復命しました。

◇ 燦たり工兵魂！！

南京城南門爆破の平石小隊

林軍曹（二中队）

燦れ、高止ます。百キロ口、爆薬を装填、見

寧南京城南門を爆破した 平石小隊の御話  
を申上ります

小隊は十三聯隊の一大隊に配属され、小隊  
長以下六十名の四ヶ分隊の特別班で、  
服装は雑褌に飯盒を入れたバツ、他は器材  
爆薬を持つるだけ持って十二月十一日、  
牛首山、西花台の要所を突破し、南京城南  
門外に突進しました

二師團の激戦車が行く、後方からは野山  
砲が援護の下に一團と成つて壕へとこま  
て進み込ませました、それが午後二時頃  
見ると敵は退却に際して橋と小橋は全  
部壊してゐる、軽渡橋をしようとするは  
行く戦友殆んど敵弾の餌食に成り、小  
隊長殿以下切當振腹です

もういふ悲惨な状況を見て小隊長殿の腹も  
きまつたのでせう、之は正面突破は不可能  
だ、右に迂迴して行かうかと言はれ迂迴し

て見ました、渡り、ハき舟がありません、  
これに二人舟の雑誌に書いてある通り、  
と言ふのだらうと思ふ程弾丸が来ます

二百米ばかり下方に対岸から二十米位り  
ころが折られて居る橋があるにはあるか  
で、すが晝間だし、それに今は一人でも情しい  
兵隊、強行突破も抑々考へるもので、  
言つて小隊長以下分隊長が集つて思案して  
ゐる時に、傳令が時の大隊長十班中佐殿の  
命令をもちたらしました

其の要旨は  
一大隊ハ今夜二四〇〇期迄に南京城南門  
城門ヲ突破、城内ニ突入セントス、  
配属小隊タル平石工兵小隊ハ、大隊攻撃  
時ニ基キ、ソレ以前ニ軽渡橋並ニ城門爆  
破ヲ完成スベシ  
とありました  
準備は既に整つておますし、更に小隊長殿

が左の如く後署を小まじた

城門爆破班

寺前軍曹の指揮する第一分隊

軽渡橋架設班

林の指揮する第二分隊

材料運搬班

田畑軍曹の指揮する第三分隊

連絡班に架橋

桓松軍曹の指揮する第四分隊

材料運搬班

器械運搬班

檜垣上等兵の指揮する

梯子架設班

持別分隊

各々今一應の夾松や準備を致しました

夕闇が中小後の頂から南東最後の夜を包み始めた頃 友軍野・重砲の両砲台からする

ところの一斉射撃が松達の目標たる南門に當るのですが 傳統の上に抗日精神が心血を

そ、いで首都防衛の設備を施してか 頑として破れません 漸く八合目位のところ

穴をあけた位のものでした 時一刻一刻とすぎます 彼我の銃砲

声もよまに 蕭々たる風さへ出て 敵がフ

けたのでせう 南東の空が関東大震災の映

象を思ひだせし林に燃えつゝ、愈々

最後の飯かと、一口一口飯盒の冷飯を味ひ

ました

二三日の何時にない莊重な然も自信ある声

で、小隊長殿が

「やうう」

と立ち上り出ました

先づ仲間上等兵(第四分隊)を長とする三名が

裸体となつて登煙班 登煙筒を頭に乘せ襟

布であごに結びつけ 背もと、かめ壊の中

に

行つて来ます

と短く一言を残してすべりこみました

五分か十分暫くすると微かにシモツ

煙の出る音と共に 螢火の標なりが右へ左

へ移動するッが見えます

幸先よし、正に成功です

次々と小隊長殿が言はれます、愈々自分

の二分隊の番です、かわて手筈をきめた通

り、總負裸体になり、今日の御用にも丹青

をこめた後の橋を持ち出し、壕に入りました

冷い、思はずビリツと来る冷さはです

全員十二名二米おきに橋を肩に人柱なんで

す

敵は友軍の企圖を察知したもろか、俄然城

壁の上から射り出します、その中を爆薬運

搬班は援護歩兵が覆ります、さうらの岸が

らは友軍の重軽機が援護する、上を通る兵

隊が

すまん

と操返しつゝ、馳せ渡ります、今はもう一つ

の目的の前に一丸となへて、死生の觀念を

超越して居るのでした

舟師軍曹の指揮する爆破班が城門そばに

たビリつき、夕方砲弾であけた穴へ梯子を

立て、林とすゝるのですが、城壁の上から手榴

弾を投げる、小銃を乱射する、で處置を

です

今は是迄、一人が斃れ、一人だと秋月上

等兵が立てましたか、梯子が左右に揺れま

す、それをつかまへて、のた秋月は頭から大

石や手榴弾をかぶつて、批烈な戦死を遂げ

ました

次は王城上等兵が交代してつかまへました

、平石小隊長殿は先頭に上られ、手渡しに

持上げる面、口の爆薬と弾痕にはふり込み

、將に臭火さ小人とするのですが、上から

石や小銃を投げるので、さばく奇声

とが出来ません

、此妖邪魔すすか





と軍刀を振りあげて呼ばれど、水の中  
で成功を祈つてゐる私達の耳に悲壯に  
聞えて参ります

よじつ小に降りまじし

と呼ばれた一言を聞

いた時は、涙がどつ

とこみ上げ、祖国

へと駆けよはか

り高さを叫ん

だもの

にニニニ  
正  
梯子を下  
り急ぐ運うらし

すると梯子を握

つておた玉城上等兵

が動きます人

0616 170

小隊長が

「オイ玉城帰へるぞ」

と声をかけると

「もう皆 降りましたか」

と蚊の鳴く様な声で言ひます 見ると左大

腿部と尻に大きな手榴弾破片創を負って居

るのです それでも猶支へてゐたのです

鬼神も泣くとはこの事ぞや 死を賭して

やり遂げたのです

それ全員でかゝへて橋の中腹まで来た時

戦友の血を以て踏はした南門は 地軸も

裂ける様な音響と共に爆破しました

思はず起つた馬車の歓声と共に 怒濤の浪

になつて殺到する友軍の重さを感じにこりへ

て私戸唾

よかつた

と繰り返して、泣いて居ました

玉城上等兵は生れは沖繩縣で 平素純情素

朴 無口な男でした 見事なもつたと思ひ

ます 戦友の手厚い看護を受け野戦病院迄

送り出したが 出血多量で施術術なく 息

を引取り最後迄

俺もよかつた 父も喜ぶ

と繰り返してゐたのです

秋月も玉城も死んだ夫ではありません

死ぬ迄しつかり梯子を握つてゐたのです

その精神に於て學ばべきものか多々ありま

す

津崎少佐（尺本部）

やはり同じ時のこと 二十三聯隊に配属

になつた徳永小隊長の部下で 村田軍曹

北山伍長の部下が全員 五十米許りの水壕

にやはり架橋に行つたのです

ところが、河の中も相當広く、しかも地盤がやはり古いもので、すから人間が立てません。仕方なく北山伍長が舟に兵隊をのせて、対岸に真先に漕ぐ。今少しといふところまで射たれて、「アッ」とも言ひ得ず河の中に釋け込まました。

村田軍曹はすかさず破網を握つて河の中に躍りこみ、真先に泳ぎまわして網を引張つて舟をつけました。援護射撃を行つておた兵隊はあまり弾丸が激しいのでなか／＼射つて、工兵は砲の破片やら石や練瓦を片付けたり、道を作り、梯子をかける。然も裸で棒立になつて舟を漕ぐ。歩兵の人が感心して、工兵に金鵄勲章をやらぬはやる者はな、い、と言つて感謝をされましたがそれだけで労苦が報ひられます。

そして歩兵も砲兵も谷間下から賞賜をいた

だいて、そこには私は牛の如く黙々も然も隼の如き機敏さを以て縁の下の方持に甘んじて死んでくれた部下に深い感謝の念を禁じ得ません。

前田准尉（器材小隊）

今も御話の通り工兵が斯うして突撃の機運を作りますけれど、占領するのには歩兵です。

然し工兵の嬉しいところは、十三聯隊に協力して南門を突破した連中が十三聯隊の兵隊と一緒に、十三聯隊萬歳を三品してくられたさうで、後で十三聯隊長殿が御札に來られたさうです。何れにしても皇軍はうでは見られぬ美しい話です。



南京攻撃騎六

目次

天狗にさらはれた 御馳走の鶏鍋	騎六上 任長 石走善吉
月下の乍候	騎六上 上算兵 菊水政治
沁々感じた戦友愛	騎六上 軍曹 濱田忠男
誰かと立派に 日本語	騎六上 曹長 古城道重
曉の殲滅戦	騎六上 中尉 福山徳次
敵ト一ケカを占領	騎六上 軍曹 新登正勝
菜庄附近 将校乍候の想出	騎六上 中尉 村上正良
綿花地の突撃	騎六上 軍曹 山崎為雄
江上の敵を猛射	騎六上 軍曹 俵伊三郎